

## カレン系言語の状況

加藤 昌彦

- 1 ビルマにおけるカレン語
- 2 狭義のカレン語の状況

- 3 カレン族のカレン語に対する危機感

### 1 ビルマにおけるカレン語

カレン系言語は現在ではチベット=ビルマ系と考えられているが、系統関係を考える上ではかつて非常に問題があった言語群である。なぜなら、シナ=チベット語族のうち、チベット=ビルマ系の言語はチベット語やビルマ語などに代表されるようにSOVの型の言語がほとんどであるのに、カレン系言語はSVOという語順を取るからである。現在では、モン=クメール系の言語あるいはタイ系の言語との接触によって語順を変えたと考えられることが多い。

有名なカレン系の民族としては、スゴー・カレン (Sgaw Karen)、ポー・カレン (Pwo Karen)、ボエー・カレン (Bwe Karen)、カヤー (Kaya)、パオ (Pao)、パダウン (Padaung)、ゲーコー (Gekho)、ゲーバー (Geba) などがいる。これ以外にも人口の少ない小部族がかなりおり、全部で20を下らないとも言われる。カレン族の人口は1993年のビルマ政府の推計によれば286万人となっているが、この「カレン」というのが何を含んでいるのかは実はよくわからない。いわゆる狭義のカレン族であるスゴー・カレンとポー・カレンを含むのは確かだとして、例えばボエー・カレンをこの数字が含むのかどうかは分からない。しかし、スゴーとポーだけでも少なくとも250万人は擁すると考えて間違いはないだろう。

カレン系民族の主要居住地域はかなり広い地域にわたっている。スゴー・カレンおよびポー・カレンは、タイ=ビルマ国境の山岳地帯、カレン州からモン州およびテナセリム管区にかけての平野部、イラワジ・デルタなどに住む。カヤーはカヤー州の全域に居住しているし、パオの居住地域はシャン州南部からモン州にかけて南北に広く分布している。これ以外の比較的小さなカレン系民族の多くは、カヤー州、カレン州北部、ペー管区北部あたりの山がちな地域に住んでいる場合が多い。日本ではカレン系民族が「山岳民族」として紹介されることが多いが、スゴー、ポー、パオなどはむしろ平地に住んでいる割合のほうが圧倒的に多いと思われる。

本発表で扱ったのは、狭義のカレン族とされているスゴーとポーである。狭義のカレン族の人口におけるスゴーとポーのうちわけは1983年の国勢調査には出ていない。1931年の国勢調査では、カレンの総人口が約136万人で、その内スゴーが約47万人くらい、ポーが約48万人であった（池田一人氏私信）。現在ではスゴーもポーも100万を下らない人口を擁するのではないかと考えられる。

次に、カレン系言語の危機度について見てみたい。カレン州の北部やカヤー州を中心とする地域にはカレン系の小部族がたくさん住んでいる。この地域の言語のいくつかは危機に瀕している可能性がある。例えば、ビルマ人言語学者 U Tun Myint によるタライン語 (Htlaing) の報告 (U Tun Myint 1979) では、タライン語の話者は1人しかいないとある。調査時の話者がかなり高齢だったようなので、現在では言語もなくなってしまった可能性がある。このタライン語と同じように、この周辺の山地カレンの小言語は、人口減少による消滅の危機に瀕している可能性がある。

一方で、狭義のカレン語であるスゴー・カレンとポー・カレン語に関しても、決して安泰とは言えない。狭義のカレン語の状況を述べる前に、狭義のカレン語についての基礎知識を解説しておく。

狭義のカレン語の中には、スゴー・カレン語、東部ポー・カレン語、西部ポー・カレン語の三つがある。これは相互理解度に基づく分類である。本人達もこのように考えていることが多い。東西のポー・カレン語は同じポー・カレン語でありながら意志疎通は無理といってもよいほど難しい。スゴー・カレン語にも東西で方言的な差はあるが、意志疎通に支障をきたすほどではない。

彼らが用いている文字のうち有名なのは、キリスト教スゴー・カレン文字、仏教スゴー・カレン文字、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字である。この名称は発表者による造語である（もっと適切な呼び方があるかもしれない）。キリスト教スゴー・カレン文字はビルマ文字に基づいて、アメリカ人宣教師ウェイド (Wade) が1830年代に考案したものである。この文字はスゴー・カレンの半数以上を占めると言われる仏教徒の間にもかなり普及していると言われるが、最近では仏教徒スゴー・カレンの一部が仏教スゴー・カレン文字を使うようになってきた。この仏教スゴー・カレン文字は、スゴー・カレンの僧侶が戦後になって考案したものだと言われる。いっぽう、キリスト教ポー・カレン文字は、ブレイトン (Braton) という宣教師が1840年代頃にキリスト教スゴー・カレン文字にならって作ったもので、東部方言に基づいている。ところが、東部地域には仏教を信じるポー・カレンが多かったためこの文字は浸透せず、その後、キリスト教徒の増えたデルタ地帯（西部方言の地域）で使われるようになっていく。現在ではキリスト教ポー・カレン文字は「西部方言の文字」と見なされることが多い（なお東部地域のポー・カレンは大部分が仏教徒である。いっぽう西部地域のポー・カレンは

1/3ほどがキリスト教徒、残りの2/3ほどが仏教徒と言われる)。西部地域で使われるキリスト教ポー・カレン文字に対して、東部方言の話される地域で使われているのが仏教ポー・カレン文字である。発表者がこの文字を仏教ポー・カレン文字と呼んだ理由は、ポー・カレン達がモン族から仏教を受容していく過程で文書を作るために自然発生的にできあがった文字だからである。最も古い文献としては1850年代のが残っている。発表者は「仏教」ポー・カレン文字と呼んではいるが、現地ではこの文字の使用に際して宗教が意識されることはあまりない。

## 2 狭義のカレン語の状況

言語の状況に移ると、狭義のカレン語のうち西部ポー・カレン語すなわちデルタのポー・カレン語がかなり弱体化しているという印象を発表者は持っている。例えば、子供たちがポー・カレン語を話していない村がかなり多い。また、同じデルタ地帯のスゴー・カレン語（スゴー・カレン語西部方言）もかなり弱体化しているように感じる。これに対して、スゴー・カレン語東部方言や東部ポー・カレン語の場合には今のところ安泰という気がしている。しかし、後で見るように東部地域でさえ話者たちは危機意識を持っている。

カレン語の状況について調査した研究はない。そこでカレン人自身がカレン語の現状をどう感じているかについて見てみたい。まずはじめに紹介するのは、1978年に出た『ラングーン大学カレン学生雑誌』に載せられたエッセーである。作者はデルタ出身のポー・カレンの学生で、原文はキリスト教ポー・カレン文字で書かれた西部ポー・カレン語文である（最初の会話部分はビルマ語）。これを読むと、カレン人の作者自身がカレン語（西部ポー・カレン語）の消滅に関してかなり強い危機感を持っていることが分かる（資料1）。

★ ဖားဝားလူမု..လားဆားလူအဖား.. ★

“စားနေရုံ... ငွါတူ”... “ဟုတ်ကဲ့... ငြီးလေး”  
 “အားမနာနဲ့, ဒွီကရင် အချင်းချင်း ထွေ့ဘဲ”  
 “ငြီးလေးက... ကရင်လူနဲ့အစစ်ဘဲလား, ...  
 ဒါဆိုရင် ... ငြီးလေးကရင်စကားပြောတတ်တာ  
 ပေါ့နော် ...”  
 “ပြောတော့မပြောတတ်ဘူးငွါ တူရယ်.....”  
 “ဒါဆိုရင်... ကရင်စကားတော့ဖတ်တတ်မှာပေါ့  
 နော်...”  
 “ဘယ်လို နေမနန်း တောင်း ... မမြင်ဘူးပါဘူး  
 ကွား...”

အကဘျားယလူထီး လားဝံးခန္ဓာဖျူအာ  
 ဆပံးကတဝါလားယဆားမလားဘာဝါအလားနီ  
 လီ၊ ယဘာအီလားတဝါခါနီဘဲရူ ဖဒီးလ  
 ဂအကံဖားလီ၊ ထီး မွဲယလူထီး ဒဲဘာယား  
 တားဝါထီးထီးထီးဆားယား လားဆားမနဲ့ဝါ  
 အံ့အဖားနီလီ၊ ယလူထီးနီမဲ့လားမုဂါလူ  
 အထိတား, ယလူထီးအီပံးအီဘဲလ ဆီဂီယ  
 ဘာအာလူထီးနီလီ၊ အာလူထီးဂီတား, ဂံဖါ  
 ဝံလားဆားဝါအီဘဲ အီအဖား တဲဝဲထဲမု  
 အံ့ဘဲအာလားလားလားအကီ? ပဆားနုဒဲဝ  
 မနုအာဝါဒဲအံ့အံ့လီ၊

ဘဲဆားချဲလားလဲထီးအာ ထီးအဝါ  
 ဂံဖါဝါဒဲယားအာ မုလဲခါချဲ လဲခါပဂဲ  
 ထဲချဲလဲဆာဘာလဲဆာ ဘဲနီအဝါလီ၊ ထီး  
 မွဲယဆဲအာစုတားစံးဘာယား လားပုလားအီ  
 လားတဝါဖားလားယထီးမဲ့ဒဲဘဲထီးဝါလီ၊ ဝါ  
 ရူလဲဖားနီချဲဝါလဲဘာလား ဘာလါနုဘိနု  
 ဝါဝါလနုဒဲနီလီ၊ အာမဲ့ဘဲဒဲဖါဆဲ  
 လဲဖားနီချဲဝါဘာအာမဲ့ဝါဝါ ဆဲအာနီလီ၊

資料 1

ထီးမဲ့အာမုဂီတားယစဲ ယဘာအီလဲ  
 တဝါထီးဖျူယာဂံပုလားထဲဝါထီးလဲ  
 လဲလဲအဝါဝဲပဒီး ဖဒီးနီလီ၊ ယထီး  
 ဒီးတဝါဖါဝဲလဲတား, ဆာတီးဆာ လီဆာ  
 ဆဲဆာမံ, ဆာပုဂုဒဲထီး လားအကြဲအီ  
 လားဖျူကျဲနီအီပုဒဲအဝါဝဲအမု အနာအဖား  
 ဝါနီလီ၊ အထီးမဲ့ဒဲဖါဝဲလဲလဲအီအ  
 ထဲအဂုလားအီဝဲလဲလဲအီနီလီ၊  
 ထီးမဲ့ယဘာစုဘာအဝါဝဲ တားစံးဘာယားအ  
 ဖါအဖား, အမိအဖါ, မဲ့ဖျူကီဂု ဒဲဒဲအ  
 ဝါဝဲစံးလဲအဝါဆဲလား ဖျူနီလီ၊ ကထဲဆဲ  
 ဆာဆီမိနုလဲ လားယဘဲ ဖားဘဲဘဲလဲတီး  
 လဲဒဲအားမလဲ, စံးလဲအဝါလားဖျူလါနု  
 ဂုချဲဝါဘာအာ, နုဝါခါဝါ နုဆဲအာတား,  
 ပုကတီးလားဖျူဘဲဘဲလဲ-အာမဲ့လဲလဲလဲနီ  
 မဲ့ပဘာလီအလားကအီ လားအာနဲ- အကီ  
 နီတားဘာဒီလား ပုလားအဖားဝါလဲလဲ  
 အလားဆားဖားမဲ့အာမဲ့အာ, ဆာမုအ  
 ဝါဒဲဆာကဲထဲဘဲထီးဝါနီလဲမဲ့ ဘာနုဝဲ  
 ခန္ဓာဖျူအဆားပံးလဲကတ ဘာမဲ့လဲဒဲထဲထာ  
 ဂီ? အဖားနီလီ၊

မဲ့ဘာလဲဆာအဂဲဘဲထီးဝါ ဘာအီထဲနီ  
 လဲ ကြဲပအာမုနုဝါလဲထီးလဲဆဲနီလီ၊  
 ဒဲဆာဘဲထီးဝါလဲက ကဘာထဲဂီထဲဒဲက  
 ဂုကဘာထဲဒဲအဂဲ ပကြဲမုဒဲဘဲလဲ၊  
 အာပဆီမိယထဲထဲတား, မဲ့ဒဲဆားမုဖဒီး  
 လဲမဲ့လားအီလားပုဖျူထဲဆာယာအာဖား  
 နီလီ၊ ပုဖျူကီဂုဒဲ ပကဘာနုဝါဆဲ ပက  
 လဲလဲကဘာလဲနီလီ၊ အကီတား, ဆာလဲ  
 ပကဘာအီဝါပံးထဲ အထီထဲနီမဲ့ဆာနီ

「どうぞ食べなさい」

「はい、おじさん」

「遠慮するなよ。私と君はカレン族同士なのだから」

「おじさんは純粋なカレン族ですよ？ だったら、カレン語ははなせますよね？」

「それが話すことはできないんだ」

「それでは ... カレン文字は読めますよね？」

「どんなものかさえ ...、いやはや見たこともないのでねえ」

かつて、私は仕事の関係でダヌービュー郡のとある村を訪れたことがある。私はその村の長老格のひとりの家に泊まることになっていた。私が行くと、私をにこにこ顔で熱烈に歓迎してくれた。私が着いたのは日が暮れる頃だったので、着いて少し休んだ後、水浴びをさせてもらった。水浴びした後、家族の人たちが心づくしのごちそうを準備してくれたので、私は皆と一緒においしく夕食を食べた。

最初に書いた会話は、このとき、私が食事をしながら家長と話しているときに出てきたものである。続けて聞いてみると、村の人々のカレン語は次のような状況にあるということだった。老人たちは、既にカレン語を話すことはできないがまだ少しは聞いて理解することができる。しかし、若者や小さい子供たちはというと、話すこともできないし、聞いてもわからないというのである。

ご飯を食べ終わると、私は村をくまなく散歩した。家々は、カレン伝統の古い家のごとく、大きく高いものだった。私は村人たちに会ったが、カレン人によくあるように、みな表情には純朴で清らかな心根があらわれていた。このような純朴さは、カレン人に古くから受け継がれた、愛すべき民族性である。私が彼らに聞いてみると、彼らの祖母も祖父も、母も父も、みなカレン人であるし、彼ら自身が自らはカレン人であると口々に言う。ところが同時に、私の心には寂しさがこみあげてきたのである。彼らは、自分達はカレン人だと言っているのに、カレン語を話すことができない。聞いてもまったく理解することができない。だとしたら、彼らをどうしてカレン人と呼べようか。話し言葉でさえこうなのだから、文学（発表者注：恐らく口承文芸を含む）など伝えているはずもなからう…。このような現状は、まるで、行く手に道がなくなってしまった旅人のようではあるまいか。これと同じような状況は、ダヌービュー県だけに限らず、実はデルタ地帯全体に広がってしまっているのである。

どうしてこのような状況が生じてしまったのか。私たちはきちんと考えてみなければならぬだろう。そして、このような状況をなくし、より良い状況をもたらすためには、私たちはどうしたら良いのか、考えてみなければならぬだろう。

考えてみると、この問題は、私たちカレン人すべてにとっての重大な問題であるように思われる。私たちカレン人は、1人1人がこの問題を理解することが義務であると思う。現状を見てみると、私たちがまず第一にしなければならないのは、次の2点である。

- (1) カレン語を話すことのできる人々は、カレン語で話すようにすること。
- (2) カレン語を理解したり話したりすることのできない人々は、カレン語が話せるよう、学習すること。

カレン語を話したり理解することのできなくなってしまった人々のために、指導すべき立場にある人たちは、打開の道を講じていただきたく願う次第である。

- 「私たちの言葉はなくなってしまうよ」
- 「私たちの口承文芸はなくなってしまうよ」
- 「私たちの遺産はなくなってしまうよ」
- 「私たちの伝統文化はなくなってしまうよ」
- 「私たちの民族はなくなってしまうよ」

サ・アイ・スー

次に見るのは、96年にタイで出た『民族の若き力』という雑誌に載せられた文章である。この雑誌はタイ側で働くビルマ国籍のカレン人が出版している。下に挙げる文章の原文は仏教ポー・カレン文字で書かれた東部ポー・カレン語である（資料2）。

<p>ကောဝ်ကြင်ခေါဟ်ဉာယိုဝ် နှိဟ်ဆိုဒ်          ဖေါဟ်သီး ကိုဝ်ဆိုဒ်ဇေဏှ် အ်သီး          လိက်လံာ်ဇေဏှ်ခိုင်ဏှ် အ်ဉးဝယ်          ဆုက်ဆုက်လှ်၊ လိက်လံာ်ဆိုခိုင်အေ          လှ်အ်စး ဆိုဒ်လှ်ဆိုဒ်ဏှ် မ်ဟ့ၤခိုင်          မ္ဗဲအေးလှ်၊ ရ်ဖျံဆိုဒ်သီးဇေယိုဝ်          သိုဝ်ဆေဝ် ဖျံဆိုခိုင်ခိုင်လိုင်အေး          ဖျံလိက်လံာ် မာလေဟ်အေးစာ်စိုဝ်</p>	<p>ယိက်ယိက်ခိုတ် ဏှ်ဖျံဆိုဒ်ယိုဝ်          မ်အ်ဉာ်ဟး.....ကထင်းဖျံလှ်ဟာ          အေလေဝ်အ်လှ်ဆိုဒ်ဗျာ်ဗျံင်ကျါ          ဏှ် ဖျံဆိုခိုင်ခိုင်လိုင်အေး ဖျံ          လိက်လံာ်သီးအဲကဲလိုင်အေးစာ်စိုဝ်          အ်ဆိုဒ်ဖျံဏှ်မ်လင်မါးဏေဝ်ယဝ်          ကးကါလှ်၊ အေအ်ဇေဏှ်သိုဝ်စာ်          စိုဝ် အ်ဏှ်ဆာ်ဖျံဏှ်သိုဝ်အေး</p>
---	---

資料2

この世界のどの民族においても、文学（訳者注：口承文芸，文字を含む）と言葉は代々受け継がれているものである。文学や言葉がなければ，その民族は強固ではなくなってしまう。カレン人も同じことだ。カレン語を話さない，カレンの文学を学ばない，ということでは，果たして将来もカレン人は存続することができるだろうか。カレン人でありながら，他の民族の間で暮らしている時には，カレン語で話さない，カレンの文学も愛さない，ということでは，カレン人という民族は簡単になくなってしまいうだろう。もしこのようなことが起きてしまったなら，人間自体は死なずに生きているが，カレンという民族は既に存在しないのである。（下線発表者）

さらに，女であっても男であっても，他の民族の間で暮らしている場合に，自分の民族を愛さない人は，そして自分の文化の消滅を惜しむ心がない人は，次の世代にカレン語を話してきかせるということがないだろう。もしそうであれば，彼らの子供がカレン語を習得することは容易ではなくなってしまう。カレン語を話すことができなくなれば，カレンの文学は，彼らからは遠い存在となってしまう。カレン人ではある，しかし，カレン語が話せない，ということになってしまったら，もはやカレンという民族はなくなってしまうのだ。母と父はカレン人であるのに，自分自身はカレン語が話せないということでは，「死人ではない

が消え去る運命だ」と言ってもよいだろう。町（訳者注：ビルマ人やタイ人の都市のことだろう）に出ていった者の中には、恥ずかしがってカレン語を話さない、恥ずかしがってカレンの民族衣装を着ない、そしてカレンの民族衣装を脱ぎ去り、カレン語を捨て去って、他の民の服を着、他の民の言葉を話す、そのうちカレン語も正確に話せなくなってしまう、その上、カレン語を馬鹿にしてカレン語で話す人を見下す、というような者がいる。カレン人ではあるが、心はカレン人ではない。カレン文字も書くことができない。そのような人は、カレン民族の血はひいているかもしれないが、もはやカレン人の範疇に入れる価値がないのだ。

将来ある若者たちよ。カレン人であるならば、カレン語に自信を持って。カレンの文学を愛せ。カレンの文化に敬意を示せ。そしてカレン民族を發展させよ。カレン人でありながら、恥ずかしがってカレン語を話さない、面倒がってカレンの文学も学ばない、カレンの伝統舞踊も恥ずかしがって踊らない。他の民族の誰かと結婚し、子供のためにカレン語を話してやることもしない、カレンの伝統文化を子孫に語り継ぐこともできない、カレン文字を教えることもできない。こうしていくうち、子孫たちはカレン語を話すことができなくなってしまう。カレン民族のことを知ることもできなくなってしまう。母親と父親がカレン人であっても、子供がカレン語を話すことができなくなれば、将来の若者たちは、死人ではないが消え去る運命、つまり死んでも同然なのだ。

チョー・ダイダウン・オウ（ボンカタイ村）

発表者は東部ポー・カレン語は安泰なほうだと見ているが、にもかかわらず実際にはこのような危機感を持っている話者がいるということは見過ごせない。

次に挙げるのは、やはり東のポー・カレン語で書かれた、「カレン語を話せ。恥ずかしがるな」という題名の詩である。やはり『民族の若き力』に掲載されている。これも作者の危機感が現れていると思う（資料3）。

## လဝ်ဖျံဆိုင်ခါင်ကးသာညှော်

ကဲထင်းဖျံဆိုင်ယုင်ဏဟံ  
 လဝ်ဖျံဆိုင်ခါင်စးစို်းလယံ။  
 ပုံကဲထင်းဖျံဆိုင်လိုဟွာ  
 စးလယံလဝ်ခါင်ဏ်ကးသာ။  
 မှာဏ်ဆိုင်ခါင်ဏ်လိုလဝ်  
 ဆိုင်ဟျံ။ဟွာသီးအင်းကျံလှံ။  
 ဖျံယုင်ဖေဟ်သီးမှဲဒ်အိုတာ  
 ဆိုင်ဖေဟ်ဆိုင်ခါင်လဝ်ခါင်သါ။  
 ဏ်ဆိုင်ခါင်ဏ်လိုယောဝ်.စုဂ်  
 ယိက်ယိက်ဆိုင်ခါင်မိုလင်အုဂ်။ \ ||  
 ကျံဂ် ကျံဂ် အံ့

資料3

カレン人じゃないか、  
どうしてカレン語を話す勇気がない？  
私たちはカレン人だ、  
どうして話すのを恥ずかしがるのだ？  
君が自分の言葉を話さなかったら、  
他の民族は君を嘲るだろう。  
ポー・カレンとスゴー・カレンの義務なのだ。  
民族の言葉を話そうよ。  
君の言葉をちゃんと守ってあげなければ、  
いずれ君の言葉はなくなってしまうよ。

チョー・チョー・オワ

### 3 カレン族のカレン語に対する危機感

最後に見る文章はビルマ語で書かれている。実はビルマ語で書かれているということ自体が、作者がカレン語ができないことを物語る。『ラングーン大学カレン学生雑誌』に掲載されたもので、スゴー・カレンの学生が書いている（資料4）。





ကရင်လူမျိုးများ အတွင်း ကရင်စကားနှင့် ကရင် စာဘတ်ကျမ်းသူများ တစတစ နည်းပါးလာမှုမှာ လက်ခံ ထိုက်သည့် အကြောင်းတရပ် မဟုတ်ပေ။ ကရင်လူမျိုး တိုင်းသည် ကရင်စကား၊ ကရင်စာနားလည်ဘတ်ကျမ်း ရန် အထူးအရေးကြီးသည်ဟု ကျွန်တော် မြင်မိသည်။ ကျွန်တော်သည် ဘား သွေးအားဖြင့် ရေ မရောသော ကရင်စစ်စစ်တဦးဖြစ်သည်။ သို့သော် ကျွန်တော် ကြိုး ပြင်း လာခဲ့ရသော ဝန်းကျင်၊ ကျွန်တော် ဘဝ အခြေ အနေများကြောင့် ကျွန်တော်သည် ကရင် စကားကို တခွန်းတခွက်ခွက် ပို၍ မသိခဲ့။ ကရင် ဖြစ်သော ကျွန်တော်သည် ကရင်စကား ထက်ချီလှပါသည်။ ကရင် စကား သင်ကြားပေးမည့်သူ၊ ကရင်စကား တတ်မြောက် ရန် နည်းနာနိသျှများကို မျှော်ဆင့်မိပါ၏။

ကံအားလျော်စွာပင် ကျွန်တော်သည် တက္ကသိုလ်သို့ ရောက်ခဲ့ရပြီ။ ကရင်စာပေနှင့် ယဉ်ကျေးမှု ကော်မတီက ကရင်စကားနဲ့ စာပေသင်တန်းဖွင့်ဘယ်တဲ့ အမရဆောင် မှာလေ။ သိရတော့ ဝမ်းပန်းဟသာ ရည်မှန်းချက်အပြည့် နှင့် သွားခဲ့သည်။ စကောကရင်၊ အရှေ့ ပိုးကရင်၊

အနောက်ပိုးကရင် သင်တန်းခွဲ သုံးခု သည်တော့မှ အော် ကရင်စကားဘဲ သုံးမျိုးဆောင် ရှိပေကဲ့။ ကျွန်တော် သိရသည်။ ကျွန်တော် ဘာသင်ရမလဲ၊ စကောကိုလား၊ အရှေ့ပိုး၊ အနောက်ပိုးကိုလား၊ အားလုံးကို တတ်ချင် သည်။ ဖြစ်နိုင်ရင် အားလုံးကိုပညာ သုံးတန်းလုံး တက်လိုက် ချင်သည်။ ခုတော့ တယောက်တည်း တက်ရမည်။ ငါ ဘာ သင်ရမလဲ။ 'ငါက စကော၊ စကော ဖြစ်တော့ စကောလို အရင်တတ်ပြီးမှ လိုသလို ဆက်ပြီး သင်ရမယ် ပေါ့'။ ဒီတော့ စကောစာနဲ့ စကားကိုတဲ ပြီးစားပေး သင်ခဲ့သည်။ သင်တန်းဆရာများကလည်း စေတနာ ထက် သန်စွာ သင်ပေးသည်။ ကျွန်တော်တို့ကလည်း ကြိုးစား မှု အပြည့်၊ သို့သော် အဆင်က ထင်သလိုမပြေ၊ အခက် အခဲက ပေါ်လာသည်။ ဆရာရော တပည့် ဖွဲ့ပါ တာ ဝန် တွေက ကိုယ်စီ၊ ဆရာ နည်းကျောင်းသား၊ တပည့် လည်း ကျောင်းသား၊ ကျောင်းစာတတ်၊ သင်တန်း ရက် မရ။ တလတာဘဲ။ သင်တန်းရက်က နည်းသည်။ အခြေခံလောက်သာ သင်ပေးနိုင်သည်။ ဆရာတွေက မိမိကိုယ်တိုင် ဆက်လက် လေ့လာဘို့ လမ်းညွှန်သည်။

カレン民族の中に、カレン語とカレン文字に習熟した人が少しずつ減っているということは、放っておいてよいことではない。カレン人がみなカレン語とカレン文字に習熟することが重要だと私は思う。私は、血統の上では純粋なカレン人である。しかし、育った環境、生活の事情などにより、カレン語を2言3言しか話すことができない。カレン人である以上、私はカレン語ができるようになりたい。カレン語を教えてくれる人からカレン語を習得するための方法を授かりたいと願う次第だ。

運良く、私は大学に入った。カレン文化委員会が、大学のアマラ寮でカレン語とカレン文字の講習を開くと聞いた。私は喜び勇んで行ってみた。スゴー・カレン、東部ポー・カレン、西部ポー・カレン、三つのクラスを開くのだという。このときカレン語に3種類があるということを知った。どれを勉強すべきだろうか。スゴーか、東部ポーか、西部ポーか。全部できるようになりたい。できればすべての講習に通いたい。でも身体はひとつだ、どれを勉強すべきだろう。私はスゴー・カレンだ。スゴーだから、スゴー・カレン語をまず習得して、それから必要があれば手を広げればよい。こうして、スゴー・カレン語を選んだ。生徒たちは努力はしたが、思ったようにうまくいかなかった。先生も生徒もそれぞれの義務がある。先生も学生、生徒も学生、大学の勉強があるから、講習の時間がとれず、1ヶ月だけ。少なすぎる。ほんの基礎の部分しか勉強できない。先生たちは、あとは自分で勉強するようにと指示した。勉強したい。学校の勉強もあるし、他にもやらなければならない仕事があるし、どうすればこの心の欲求に身体がついていくことができるのだろう。しかし、講習でいちおうの基礎は身につけた。でも、「俺がカレン語が上手になるなんてことはあるわけないよ。忙しくて...ああ無理だ。学校を卒業したら余計に無理だ」などと、遠い道のりを考えるとうんざりしたくもなってしまう。しかし、カレン語ができるようになりたいという気持ちは増すばかり。

ある日、私は叔父のひとりと会う機会があった。私は自分の希望と事情をすべて叔父に話した。すると叔父は、「がっかりするなよ。叔父さんがいい方法を教えてやるから」と言ってくれた。(以下省略)

ソー・トゥーガレー

この後、若い頃カレン語を全く話すことができなかった作者の叔父が、カレン語が話せる女性と結婚して毎晩新しい単語を三つずつ教わり、遂にカレン語が流暢に話せるようになった、という話が紹介されている。

これらの文章には、カレン族のカレン語に対する危機感が現れている。重要なことは、スゴーやポーのような大きな言語でさえ、方言によってはビルマ語化が進んで若い世代がカレン語を話さなくなっているという状況があり、彼ら自身がこのことに危機感を持っているということである。一部のカレン人たちは文字の学習を通してカレン語の保存運動を行っている。キリスト教系の文字であれば教会が、仏教系の文字であれば僧院が、教育の場となっている。しかし、西部ポー・カレン語には仏教系の文字がないため、約3分の2を占めると言われるこの地域のポー・カレンはカレン語の教育が受けられないという現状がある。

最後に、「危機言語」運動という立場を標榜してカレン語を研究する際に生じ得る問題について触れておきたい。ビルマ政府側から見れば少数民族の言語、特にカレン人のような最も先鋭的な反政府武装闘争を続けてきた民族の言語は、決して保存することを奨励したい対象ではない。発表者はカレン州での調査において、連日のように当局の尋問を受けた経験がある。発表者を泊めてくれたカレン人の友人も尋問を受けた。彼は公務員だが、このことがきっかけで解雇される可能性も否定できない。ただでさえこのような状況なのだから、危機言語を救うという立場を標榜したとき、いたずらにビルマ政府を刺激する危険性があり、このことはビルマ側のカレン弾圧を強める一因となりかねない。つまり「危機言語の調査」という立場による調査は、いわば当該地域をかき乱す「外圧」となり得るのではないか。あらゆる現地調査そのものが現地に何らかの影響を与える行為であることを考えると、「危機言語の調査」という思想性の高い看板を背負った調査は調査地をかきみだす危険度がより高いように思える。われわれ調査者にはこの上ない慎重さが求められている。

## 文 献 (発表で引用したもののみ)

Benedict, P. K.

1972 *Sino-Tibetan: A conspectus*. New York: Cambridge University Press.

飯島茂

1974 「国民形成と少数民族問題——ビルマにおけるカレン族の悲劇」『アジア・アフリカ言語文化研究』8, 117-135.

加藤昌彦

1998 「カレン諸語」新谷忠彦編『黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』pp.62-70, 東京外大 AA 研。(コラム「カレン系言語の文字」も参照)

Lehman, F. K.

1967 Kayah society as a function of the Shan-Burma-Karen context. In J. H. Steward (ed.), *Contemporary change in traditional societies*, vol.II, pp.1-104, Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press.

Matisoff, James A.

1991 Sino-Tibetan linguistics: Present state and future prospects. *Annual Review of Anthropology* 20, 469-504.

U Thun Myint

1979 Syntax of Htlaing. (in Burmese) *Takkasuil Sutesana Caacong* (『大学研究論文集』) 1, 75-112.

藪司郎

1988 「カレン語群」『言語学大辞典』pp.1312-1318, 東京:三省堂。

